

中日漢字の形態・音韻類似性が中国人上級日本語学習者の 日本語漢字単語の口頭翻訳課題に及ぼす影響

費 曉 東

The Effect of Orthographical and Phonological Similarities between Chinese and
Japanese in an Oral Translation Task with Japanese Kanji-Words

Xiao-dong FEI

キーワード：中国人上級学習者、漢字単語、形態・音韻類似性、口頭翻訳課題、聴覚呈示事態

1. 問題と目的

中国語を母語 (native language: first language とほぼ同義として以下, L1) とする上級の日本語学習者が、聴覚呈示される日本語の漢字単語を口頭で翻訳する際、漢字単語の2言語間の形態・音韻類似性は、どのような影響を及ぼすのだろうか。本研究では、この問題を扱う。

中国語と日本語 (以下, 中日) は、漢字という共通の表記形態を有しており、2言語間の漢字語彙の8割以上は同形語であり、約半数は同形同義語であるという (e.g., 胡, 2012; 蔡, 2009; 松見・邱・桑原, 2006)。近年の研究では、中国語 L1話者が第二言語 (second language: 以下, L2) である日本語の漢字単語を処理する際、L1の形態・音韻情報による影響が生じることが明らかとなった (e.g., 費・松見, 2012; 松見・費・蔡, 2012; 蔡・費・松見, 2011; 蔡・松見, 2009)。中日2言語間の形態・音韻類似性は本研究の重要概念であるため、ここで、先行研究での定義 (費・松見, 2012, 2013) を紹介する。日本語の漢字単語そのままの形、あるいは似ている形が中国語にも存在する場合は、形態類似性が高い単語とし (学校: gakkou - 学校: xuexiao)、中国語に存在しない場合は形態類似性が低い単語とする (泥棒: dorobou - 小偷: xiaotou)。茅本(1995)の異形度 (漢字の構造上の物理的な違い) の分類¹⁾を参考に、形態類似性が高い単語は、中日間で全く同じ漢字 (学-学)、点や線が1画だけ異なる漢字 (歩-歩)、偏や旁など構成要素の一部だけが少し異なる漢字 (語-語)、のいずれかを使用する。日本語漢字単語の読みが、中国語読みと似ている場合は、音韻類似性が高い単語とし (散歩: sanpo - sanbu)、中国語読みと似ていない場合は、音韻類似性が低い

単語とする (交通: koutsuu - jiaotong)。先行研究の調査では (当銘・費・松見, 2012)、単語の日本語読みと中国語読みをペアで聴覚呈示し、日本語学習経験のない中国語 L1話者26名に類似性評定をさせた。音韻類似性高・低の基準は、その平均評定値による。

形態や音韻の類似性を操作した先行研究の結果により、中国語を L1 とする日本語学習者における日本語漢字単語の処理過程について、以下のことが明らかとなった。

- (1) 学習者が視覚呈示される日本語漢字単語を処理する際、2言語間の形態・音韻類似性による促進効果が生じる (蔡他, 2011)。
- (2) 学習者が聴覚呈示される日本語漢字単語を処理する際、2言語間の形態類似性による促進効果及び音韻類似性による抑制効果が生じる (費・松見, 2012)。
- (3) 視覚・聴覚の両呈示事態において、学習者の日本語の習熟度や学習環境の変化によって、日本語漢字単語の処理過程が変容する (長野・松見, 2013; 費, 2013)。

この3点は、学習者が目で見たり、あるいは耳で聞いた漢字単語をどのように処理 (理解) するかに関する結論であり、漢字単語の理解過程の様相を示すものである。松見他 (2012) は、先行研究の知見をふまえ、中国語を L1 とする日本語学習者の心内辞書 (mental lexicon) モデルを提案した (図1を参照)。このモデルは、Kroll & Stewart (1994) で提唱された改訂階層モデル (revised hierarchical model) を精緻化し、2言語の形態表象と音韻表象を明記し、概念表象を加えて、各表象間の連結関係を考慮して構築された。従来モデルに比べ、2つの言語の形態表象と音韻表象の共有・非共有関係を

見出した点が優れている（費・松見, 2013）。すなわち、1）形態類似性が高い単語は2言語間で形態表象が共有され、形態類似性が低い単語は2言語間で形態表象が分離・独立していること、2）中日の音韻類似性の高低にかかわらず、音韻表象は2言語間で分離・独立していること、の2点である。

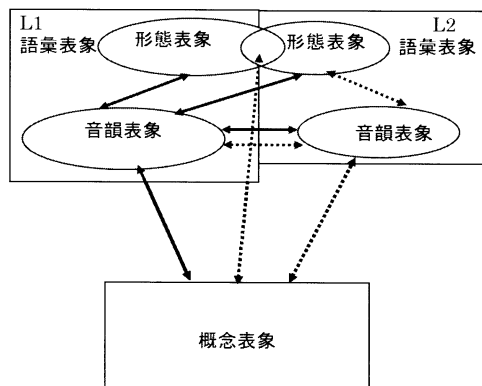


図1 中国語をL1とする日本語学習者の心内辞書モデル（松見他, 2012より引用, 一部改変）

では、単語の理解過程でみられた現象は、産出を伴う過程においてもみられるのだろうか。また、図1で示す心内辞書は、産出を伴う過程においてどのような働き方をするのであるか。本研究では、聴覚呈示事態による口頭翻訳課題（oral translation task）を用いて、これらの問題を検討する。単語の理解過程を検討した研究では、語彙判断課題（lexical decision task）が多く採用されている。語彙判断課題では、単語の意味処理が求められるが、音声出力は要求されない。また、音声産出を伴う課題として単語の読み上げ課題（naming task）がよく採用されるが、読み上げ課題では必ずしも単語の意味処理が行われるとはいえない。これら2つの課題に比べ、翻訳課題は、単語の概念表象へ意味アクセスすることと音韻を出力することの両方が求められるので、理解過程と産出過程の様相を比較する際に有用な課題となろう。視覚呈示事態による口頭翻訳課題では、学習者が目で見えた日本語の漢字単語を中国語で翻訳することが求められる。形態類似性が高い単語の形態表象が中日2言語間で共有されるため、学習者がこのような属性をもつ漢字単語を翻訳する際、単語の概念表象へ意味アクセスする前に、形態情報だけで翻訳（命名）する可能性がある。この点について、L2の単語が、それに対応するL1の単語と直接結び

ついている、という単語連結仮説（word association hypothesis）の理論（Potter, So, Von Eckardt, & Feldman, 1984）からも考えられよう。一方、単語の音韻情報の入力から処理が始まる聴覚呈示事態による口頭翻訳課題では、形態情報によるインプットがないため、形態情報から直接的に翻訳（命名）することを避けられる可能性が高いと考えられる。本研究では、聴覚呈示事態による口頭翻訳課題を採用して検討を行う。

口頭翻訳課題による反応時間は、単語の音声呈示開始から口頭産出（翻訳同義語（translation equivalence）を出力する）までの時間となり、反応時間の長短は、日本語音からL1翻訳語の産出までの反応の速さを反映する。この反応時間には、理解過程と産出過程の両方の反応が含まれるため、両過程のそれぞれの処理を分析することはできない。そこで、本研究では、語彙判断課題を採用した先行研究の結果（理解過程）と比較し、漢字単語の産出過程の検討を試みる。

実験では、中日2言語間の形態・音韻類似性が操作されるため、各種類による反応時間の長短に違いがみられた場合、その種類の単語の処理パターンが推測される。実験仮説は、以下のように立てる。

【仮説1】 形態類似性が高い単語は、2言語間で形態表象が共有されているので（蔡・松見, 2009, 松見他, 2012）、理解過程（費, 2013）及び産出過程の両方において促進効果がみられると考えられる。よって、音韻類似性の高低にかかわらず、形態類似性が高い単語は低い単語よりも反応時間が短くなるであろう。

【仮説2】 理解過程では、L1の音韻表象の活性化によって、音韻類似性の抑制効果がみられる（費, 2013）。産出過程では、最終的に中国語音で出力するため、形態類似性が高い単語の場合、活性化したL1の音韻表象による促進効果（活性化した音韻情報と産出する音韻情報が一致する）が生じると考えられる。よって、産出過程の促進効果と理解過程の抑制効果が同程度に働く場合、音韻類似性による効果がみられず（仮説2-1）、産出過程の促進効果がより強く働く場合、音韻類似性が高い単語の反応時間が短くなり（仮説2-2）、逆に理解過程の抑制効果がより強く働く場合、音韻類似性が高い単語の反応時間が長くなる（仮説2-3）であろう。

一方、形態類似性の低い単語の場合、活性化したL1の音韻表象による抑制効果（活性化した音韻情

報と産出する音韻情報が一致しないこと)が生じると考えられる。理解・産出の両過程に抑制効果がみられるため、音韻類似性の高い単語は低い単語よりも反応時間が長くなる(仮説2-4)であろう。

2. 方法

2.1. 実験参加者

中国語をL1とする上級の日本語学習者16名(女性10名, 男性6名)であった。全員が中国の大学で日本語を主専攻とする大学生であり, 日本に留学する前にすでに旧日本語能力試験1級を取得していた。本実験に参加した時点で, 全員が日本の大学で留学生生活を送っており, 日本滞在期間は半年から2年半であり, 日本語学習歴は4年半から9年であった。

2.2. 実験計画

2×2の2要因計画を用いた。第1の要因は形態類似性であり, 高低の2水準であった。第2の要因は音韻類似性であり, 高低の2水準であった。2つの要因ともに参加者内変数であった。

2.3. 材料

すべての単語は, 国際交流基金(2002)の3, 4級単語リストの中から選定した。当銘他(2012)の音韻類似性の調査資料をもとに, 形態・音韻類似性の高低に基づき, 「形態・音韻類似性が高い単語」, 「形態類似性が高く音韻類似性が低い単語」, 「形態類似性が低く音韻類似性が高い単語」, 「形態・音韻類似性が低い単語」について, それぞれ14個, 計56個を選定した(表1を参照)。各種類の単語は, 天野・近藤(2000)の資料にもとづいて出現頻度が統制された。4種類の単語の出現頻度について, 平均頻度を算出し, 分散分析を行った結果(本研究では, 有意

水準をすべて5%に設定した), 単語の条件間で有意差は生じなかった($F(3,52)=2.12, p=.109, \eta^2=.01$)。4種類の単語の出現頻度はほぼ同質であるとみなされた。

音声刺激について, 日本語教師経験がある女性の東京方言話者に録音してもらい, それらの音声を聴覚呈示用に編集した。

2.4. 装置

実験プログラムは, SuperLab Pro (Cedrus 社製 Version 4.0) を用いて作成された。また, 実験では, パーソナルコンピュータ (SOTEC PC-R502A5) とボイスキー (Cedrus SV-1) が用いられた。音声呈示をするために, ヘッドホンが用いられ, 実験参加者の口頭反応を録音するために, ICレコーダー (Voice-Trek V-61) が用いられた。

2.5. 手続き

実験は個別に行われた。本試行の前に練習試行が6試行行われた。実験参加者は, ヘッドホンから1個ずつ音声呈示される日本語単語を, できるだけ速く且つ正確に中国語に口頭で翻訳するように教示された。実験本番中, ボイスキーを勝手に反応させないために, 翻訳語を考えるとときに, 「えーと」「あー」のような発言を避けるように, また, 単語の意味が分からないときに, 「わからない」と言うか黙って次の単語が呈示されるまで待つように教示された。

1試行の流れを図2に示す。音声が出てくる合図としてパソコン画面に注視点が500ms呈示された後, 500msの空白をおいて日本語の単語が音声呈示された。単語の呈示時間は最大6000msで, この間に実験参加者の反応があるか, 反応がなく6000msが経過した場合, 2000msの間隔をおいて次の試行に移った。反応時間は, 音声単語が呈示されてから実験参加者が口頭反応するまでの時間であり, ボイスキーを通じて自動的に計測された。翻訳の正誤を確認するために, 実験参加者の許可を得て参加者の反応がすべて録音された。

表1 実験で使用された材料の例

口頭翻訳課題用の単語材料			
+形+音	漫画	-形+音	案内
	電話		残念
	空気		心配
+形-音	学校	-形-音	試合
	交通		部屋
	生活		子供

※「+」は類似性高を, 「-」は類似性低を表す。

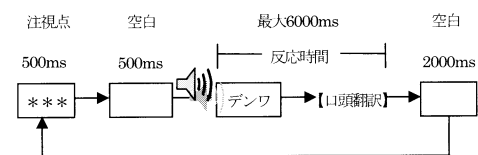


図2 実験における1試行の流れ

本試行終了後、未知単語のチェックおよび実験参加者の言語学習歴に関する筆記回答式の調査が行われた。

3. 結果

分析対象は15名であった。実験参加者1名のデータは、実験時の機器の不具合の問題で半分以上の反応が記録されなかったため、分析対象から除外された。各実験参加者における誤答、無答、未知単語も分析対象から除外された。各条件の正反応について平均反応時間及び標準偏差 (SD) を求め、平均正反応時間 $\pm 2.5SD$ から逸脱したデータは外れ値として分析対象から除外された。除外率は15.36%であった。

各条件の平均正反応時間について2要因分散分析を行った結果 (図3を参照)、形態類似性の主効果 ($F(1,14)=46.14, p<.001, \eta^2=.30$)、音韻類似性の主効果 ($F(1,14)=7.22, p=.018, \eta^2=.01$) が有意であった。また、形態類似性 \times 音韻類似性の交互作用が有意傾向であった ($F(1,14)=4.13, p=.062, \eta^2=.01$)。試みに単純主効果の検定を行った結果、音韻類似性の高い単語 ($F(1,28)=48.57, p<.001, \eta^2=.20$) と、低い単語 ($F(1,28)=26.07, p<.001, \eta^2=.11$) の両方において、形態類似性の高い単語は低い単語より反応時間が短いことが分かった。また、形態類似性の低い単語 ($F(1,28)=11.19, p=.002, \eta^2=.02$) において、音韻類似性の高い単語は低い単語よりも反応時間が長く、形態類似性の高い単語において ($F(1,28)=0.27, p=.607, \eta^2=.00$)、音韻類似性の高い単語と低い単語との間

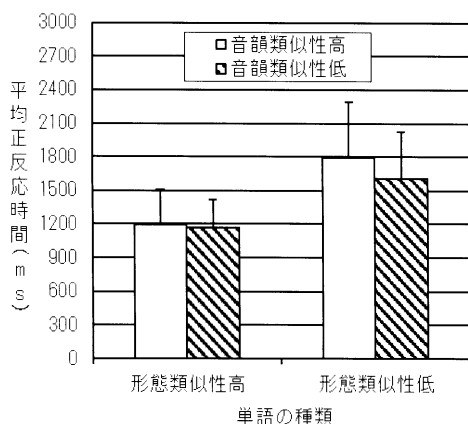


図3 実験の各条件における平均正反応時間及び標準偏差

に有意な差はみられないことが分かった。

なお、各条件における誤答率を算出し、角変換した値 (表2を参照) について、反応時間と同様に2 \times 2の2要因分散分析を行った。その結果、音韻類似性の主効果に有意傾向がみられ ($F(1,14)=4.54, p=.051, \eta^2=.06$)、音韻類似性の高い単語は低い単語よりも反応時間が長い傾向にあることがわかった。形態類似性の主効果 ($F(1,14)=1.53, p=.236, \eta^2=.04$)、形態類似性 \times 音韻類似性の交互作用 ($F(1,14)=2.84, p=.114, \eta^2=.02$) は、いずれも有意ではなかった。誤答率に関する以上の結果から、いずれの条件間でも、反応時間が短い条件で誤答率が高く、逆に反応時間が長い条件で誤答率が低いという、トレードオフ (trade-off) 現象は生じなかったといえる。したがって、本実験の反応時間には、課題遂行に要する時間の相対的な長短が反映されていると考えられる。

表2 各種類の単語の誤答率及び標準偏差

	+形+音	+形-音	-形+音	-形-音
誤答率	6.51	4.58	13.46	5.48
(SD)	(9.40)	(7.74)	(11.64)	(9.20)

4. 考察

本研究では、中日漢字の形態・音韻類似性が中国人上級日本語学習者の日本語漢字単語の口頭翻訳課題に及ぼす影響を検討した。

実験の結果、音韻類似性の高低にかかわらず、形態類似性による促進効果がみられ、仮説1が支持された。また、形態類似性の高い単語において、音韻類似性の効果がみられず、形態類似性の低い単語において、音韻類似性による促進効果がみられた。仮説2-1、仮説2-4が支持されたといえよう。語彙判断課題を採用した費 (2013) の結果及び本実験の結果の比較を表3に示す。費 (2013) の処理過程モデル及び本実験の結果に基づき、聴覚呈示における日本語漢字単語の翻訳過程をモデル化したものが図4である。以下、図4に沿って、本研究における口頭翻訳課題の過程を考察する。

音韻類似性の高低にかかわらず、形態類似性による促進効果がみられた。費 (2013) でも、同様な結果がみられた。これらの結果は、形態類似性が、漢字単語の理解・産出の両過程に促進効果をもたらすことを示している。音韻類似性の高い単語は、活性

表3 先行研究（費，2013）と本研究の結果の比較

費（2013）：語彙判断課題	本研究：口頭翻訳課題
+形（短），-形（長）：有意差あり +音（長），-音（短）：有意差あり	+形（短），-形（長）：有意差あり +音（長），-音（短）：有意差あり
【+音】+形（短），-形（長）：有意差あり 【-音】+形（短），-形（長）：有意差あり 【+形】+音（長），-音（短）：有意差あり 【-形】+音（長），-音（短）：有意差あり	【+音】+形（短），-形（長）：有意差あり 【-音】+形（短），-形（長）：有意差あり 【+形】+音（長），-音（短）：有意差なし 【-形】+音（長），-音（短）：有意差あり

化した中国語の音韻表象を經由して概念表象に意味アクセスしてから翻訳が行われる（図4のa1, b1, ①, ②とa2, b3, ⑤, ⑥）。形態類似性の高い単語は、すでに活性化した音韻情報と出力する音韻情報と一致するため（図4のI），速く翻訳できたが（図4の①, ②），形態類似性の低い単語は、すでに活性化した音韻情報（図4のII）と出力する音韻情報（図4のIV）と一致しないため干渉が生じて（図4の⑦），反応時間が長くなった（図4の⑤, ⑥）と考えられる。音韻類似性の低い単語は、中国語の音韻表象を經由せずに概念表象に意味アクセスしてから翻訳が行われる（図4のa1, b2, ③, ④とa2, b4, ⑧, ⑨）。形態類似性の高い単語は、形態そのままの形が中国語に存在しない形態類似性の低い単語（図4のV）よりも、2言語間で形態表象が共有されているため、翻訳過程において中国語の音韻情報（図4のIII）が活性化しやすく、速く反応されたと考えられる。音韻類似性の高い単語も類似性の低い

い単語も、形態類似性が高い場合、単語の理解（費，2013）・産出（本実験）の両過程において、速く反応されることが推察できる。

形態類似性の高い単語による音韻類似性の効果がみられなかったが、形態類似性の低い単語による音韻類似性の抑制効果がみられた。費（2013）と一部結果が異なることがわかった（表3の下線部を参照）。費（2013）では（理解過程），形態類似性の高い単語において、音韻類似性の高い単語（図4のa1, b1）は類似性の低い単語（図4のa1, b2）よりも反応時間が長いことが報告された。音韻類似性の効果がみられなかった本実験の結果から、口頭翻訳の産出過程では、音韻類似性の高い単語（図4の①, ②）は低い単語（図4の③, ④）よりも反応時間が短いことが考えられる。すなわち、理解過程ですでに活性化した中国語の音韻表象（図4のI）は、口頭翻訳課題の産出過程に促進効果をもたらしたことが窺える。形態類似性の低い単語による音韻類似

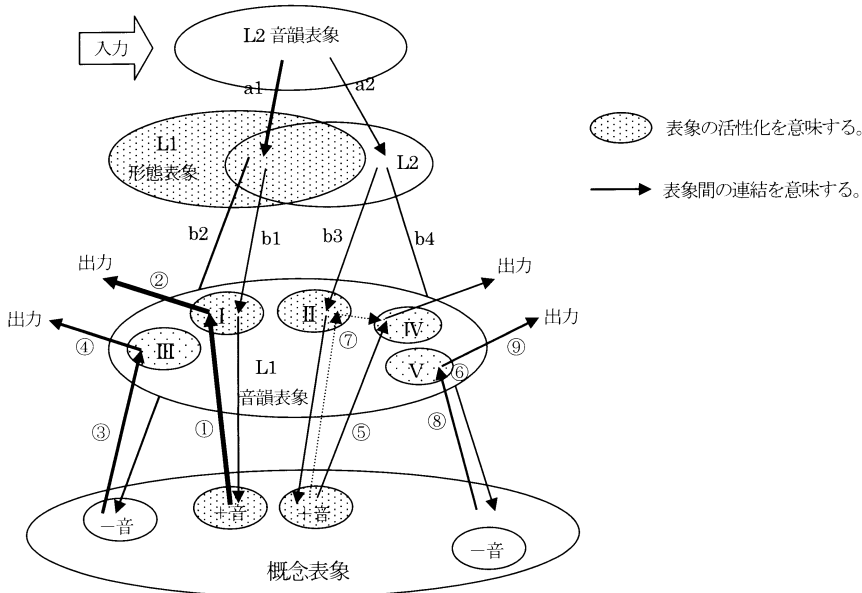


図4 上級日本語学習者における日本語漢字単語の口頭翻訳過程（費，2013を参考に作成）

性の抑制効果は、理解・産出の両過程にみられると考えられる。形態類似性の低い単語は、2言語間の形態表象が分離・独立構築されているため、中日の形態情報が別々の表象に内在化している。以下、「財布」とその翻訳同義語である「钱包：qian bao」を例にして説明する。「財布」が呈示されると、中国語との音韻類似性(cai bu)を通して、まず活性化したのは日本語漢字のそのままの中国語読み(図4のⅡ)であった。しかし、「財布」を中国語に翻訳する際、翻訳同義語である「钱包：qian bao」(図4のⅣ)で出力しなければならないため、2つの音韻情報の不一致による干渉が生じてしまうこと(図4の⑦)が推察できる。

最後に、漢字単語が概念表象に意味アクセスする前に翻訳されることの可能性について検討・吟味する。すなわち、実験の結果から、本研究の前提となっている口頭翻訳課題の「2段階説(理解・産出)」について検証してみたい。

形態類似性の高い単語は、中日2言語間で形態表象が共有されているため(e.g., 蔡・松見, 2009; 松見他, 2012), L1の形態・音韻表象が迅速的に活性化することによって、概念表象に意味アクセスする前に翻訳される可能性が一番高いと推測できる。仮に、形態類似性の高い単語は、日本語音が呈示されてから、2言語の形態表象、あるいは中国語の音韻表象を経由して翻訳されるとするならば、日本語音の入力から活性化した中国語の音韻表象から直接に翻訳される(図4のa1, b1, ②)ため、音韻類似性による促進効果がみられると考えられる。音韻類似性による効果がみられなかった本実験の結果から、この仮定が成立しないことが示唆されるといえる。また、費(2013)のすべての単語材料の平均正反応時間(399.39ms)に比べ、本研究における口頭翻訳課題の平均反応時間(1439.31ms)は、3倍以上長かった。聴覚呈示の事態を用いた場合の口頭翻訳課題は、意味理解をせずに単語連結によって処理される可能性が低いことが推察できよう。この点については、今後、さらに実証的な検討をしていきたい。

5. まとめと今後の課題

本研究では、日本語の漢字単語について、従来の理解過程を扱った先行研究に比べ、産出を伴う処理過程を検討した。聴覚呈示事態を用いた口頭翻訳課

題を実施した結果、漢字の中日2言語間の形態・音韻類似性が、理解過程と産出過程に異なる効果をもたらすことが示唆された。本実験の結果は、中国語L1話者における日本語漢字単語の産出モデルの構築という点で示唆に挑む。そこで、今後の課題として、以下の2点を提示する。

1点目は、産出が求められる口頭翻訳課題の説明論理を確立することである。口頭翻訳課題では、理解と産出の両過程が想定されているが、その妥当性をさらに検証する必要がある。また、表音文字を有する印欧語族の言語について、翻訳過程では、単語連結と概念媒介の2つのルートがあることが実証されているが、表意文字を有する中日の2言語について、その2つのルートがどのようにになっているかは検討されていない。この2点をふまえ、口頭翻訳課題は、単語の処理過程を検討する際の重要な課題として、結果を解釈する際の共通の説明理論を確立することが重要であるといえる。

2点目は、単語の形態・音韻情報だけでなく、意味という属性を要因とした実験的検討を行うことである。同形同義語や非同形語とは異なり、中日の同形異義語の処理課題では、2つの言語の意味情報が活性化することが考えられる。語彙レベルの活性化と概念レベルの活性化がどのようにになっているのか、また、理解過程と産出過程のそれぞれにおいて、どのような処理がみられるのか、の2点は興味深い。これらのことを明らかにすることによって、産出過程のあり方がより明瞭になるであろう。

注

- 1) 茅本(1995)は、中日漢字の異形度に関して、形態が同じならば「異形度0」、点や線が一画違っていれば「異形度1」、構成部分のうち小さい方が違っているならば「異形度2」、構成部分の大きい方が、両方が違っているか、構成部分が欠落しているならば「異形度3」、まったく違う字体になっているならば「異形度4」として、分類した。

引用文献

天野成昭・近藤公久(2000). 『NTT データベース シリーズ 日本語の語彙特性 文字単語親密度』三省堂

- 蔡 鳳香 (2009). 「中国人上級日本語学習者の日本語漢字単語の処理過程一文の先行呈示事態における検討」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部 (文化教育開発関連領域)』58, 205-212.
- 蔡 鳳香・松見法男 (2009). 「中国語を母語とする上級日本語学習者における日本語漢字単語の処理過程一同根語と非同根語を用いた言語間プライミング法による検討」『日本語教育』141, 13-24.
- 蔡 鳳香・費 曉東・松見法男 (2011). 「中国語を母語とする上級日本語学習者における日本語漢字単語の処理過程一語彙判断課題と読み上げ課題を用いた検討」『広島大学日本語教育研究』21, 55-62.
- 費 曉東 (2013). 「日本留学中の中国人上級日本語学習者における日本語漢字単語の聴覚的認知一中日2言語間の形態・音韻類似性を操作した実験的検討」『留学生教育』18, 35-43.
- 費 曉東・松見法男 (2012). 「中国語を母語とする上級日本語学習者における日本語漢字単語の聴覚的認知一中日二言語間の形態・音韻類似性による影響」『教育学研究ジャーナル』11, 1-9.
- 費 曉東・松見法男 (2013). 「中国語を母語とする上級日本語学習者の日本語文の聴解における日本語漢字単語の処理過程一文の制約性及び単語の形態・音韻類似性を操作した実験的検討」『第二言語としての日本語の習得研究』16, 107-124.
- 胡 曉睿 (2012). 「漢字の音読みの習得に及ぼす母語の影響一中国人日本語学習者の場合」『明海日本語』17, 93-102.
- 茅本百合子 (1995). 『日本語漢字の読みに及ぼす母語の音韻情報の影響一中国語母語話者の場合一』平成6年度広島大学大学院教育学研究科修士論文 (未公刊)
- Kroll, J. F., & Stewart, E. (1994). Category interference in translation and picture naming: Evidence for asymmetric connections between bilingual memory representations. *Journal of Memory and Language*, 33, 149-174.
- 国際交流基金 (2002). 『日本語能力試験出題基準改訂版』凡人社
- 松見法男・邱 學瑾・桑原陽子 (2006). 「語彙の習得」縫部義憲 (監修)・迫田久美子 (編著)『講座・日本語教育学 第3巻 言語学習の心理』第3章2節 (pp.161-183), スリーエーネットワーク
- 松見法男・費 曉東・蔡 鳳香 (2012). 「日本語漢字単語の処理過程一中国語を母語とする中級日本語学習者を対象とした実験的検討」畑佐一味・畑佐由紀子・百濟正和・清水崇文 (編著)『第二言語習得研究と言語教育』第1部 論文2 (pp.43-67), くろしお出版
- 長野真澄・松見法男 (2013). 「中国語を母語とする上級日本語学習者の日本語漢字単語の処理過程一日本留学中の学習者を対象とした語彙判断課題, 読み上げ課題による検討」『広島大学日本語教育研究』23, 33-40.
- Potter, M. C., So, K.-F., Von Eckardt, B., & Feldman, L. B. (1984). Lexical and conceptual representation in beginning and proficient bilinguals. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, 23, 23-38.
- 当銘盛之・費 曉東・松見法男 (2012). 「日本語漢字二字熟語における中国語単語との音韻類似性の調査一同形同義語・同形異義語・非同形語を対象として」『広島大学日本語教育研究』22, 41-48.